

九州の森と林業

No.45

森林総合研究所九州支所

アカヒゲの繁殖生態を調べる

ートカラ列島での調査ノートからー

鳥獣研究室 関 伸 一

鳥獣研究室では、トカラ列島中之島（図ー1）においてアカヒゲ（写真ー1, 2）の繁殖生態の調査を開始しました。アカヒゲは南西諸島と男女群島のみに生息が確認されている日本固有種で、国の天然記念物に指定されています。しかし、中之島においてはごく身近な鳥の1つです。

1. アカヒゲ営巣事情

「アカヒゲは巣を作るのがものすごく早いですよ、2～3時間したら完成します」と教えてくれたのは島の小学校の先生です。ある晴れた朝、彼が庭先にジーンズを干しました。昼ごろ、取り込もうとするとアカヒゲが警戒声をあげ、近づいても逃げようとしません。ズボンの中をのぞいてみたら巣が出来ていたそうです。そのジーンズはその後1カ月以上も干しっぱなしになったということです。他にも、換気扇の中、牛小屋、空き家、洗濯かごなどは人家の周辺でアカヒゲが好む営巣場所です。

アカヒゲの巣は広葉樹・リュウキュウチクなどの落葉を利用して作られます（写真ー3）。巣の近くの地上から無造作に集めてくるので、本当に2～3時間で、大まかな形は出来てしまいます。「産

座（卵を生む窪み）」を作るときには分解の進んだ落葉・ツル植物の根などの少し柔らかい材料を用



図ー1 トカラ列島の位置

トカラ列島は南西諸島の北部、屋久島と奄美大島の上に位置する地域で、約150キロに渡って10余りの島が点在している。この地域に関するこれまでの調査で、渡り鳥の中継地としての重要性和同時に、危急種・希少種の生息地としての重要性についても明らかになった。アカヒゲの他にもカラスバト、アカッコ、イイジマムシクイなどが繁殖している。



写真-1 アカヒゲのメス成鳥

アカヒゲは体重約25g、体長15cmほど、コマドリと非常に近縁の鳥である。南西諸島の中でも、さらに形態と生態に違いがあり、現在のところ3亜種に分類されている。捕獲された個体は個体識別のための足輪をつけ、各部を計測したのちに放される。

いて仕上げます。巣作りはメスのみで行い、オスが協力することはありません。

森林での営巣場所は樹洞・枝の根本・岩棚などです。巣箱の利用率も高いので、調査の際には森林内に巣箱を架設してそこで繁殖する個体を追跡しています。

2. アカヒゲの子育て

「アカヒゲって卵を生んでから、どのくらいで巣立ってくれますか?」というのはの民宿の若旦那の質問。この民宿では、台風でも来ない限りは



写真-3 アカヒゲの卵

産卵数は2~4個。メスは1日に1卵ずつ産卵する。卵の重さは1つ2.8~3.9gなので、4個の卵はメスの体重の50%以上になる。



写真-2 オス成鳥

顔からのどにかけての黒いのが特徴。他の亜種では「1夫2妻」の例も報告されているが、中之島ではいまのところすべて「1夫1妻」。オスは0.1~0.2haのなわばりを防衛し、繁殖期のつがいはほとんどその中だけで生活する。

戸戸を開け放しにしています。最近、どうも戸袋のあたりでアカヒゲが騒がしいので覗いてみたら、戸板の上に巣が出来て卵が生んであったというのです。天気予報で台風の発生が告げられる時期となり、アカヒゲが何日で巣立つかは重大問題だったので。

アカヒゲが巣立つまでには約1カ月かかります。産卵が終わるとメスが卵を温め、約2週間で孵化します。雛への給餌はオス・メス共同で行います(写真-4)。親鳥が運んでくる餌は土壌動物や樹上の昆虫などです。雛は孵化から10日ほどで親と

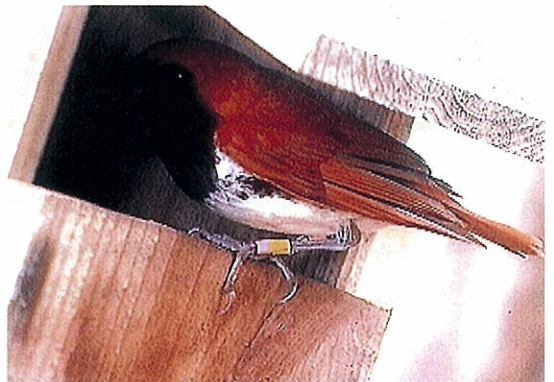


写真-4 給餌のために巣箱を訪れたオス

デジタルビデオカメラを用いて親鳥の給餌行動を記録する。1羽の親が給餌に訪れる回数は1時間に2~7回ほど。



写真-5 アカヒゲの巣立ち

ほぼ同じ体重になり、13～16日で巣立ちます(写真-5)。しかし、巣立ち時の雛は翼と尾が伸びきっておらず、あまり飛ぶのがうまくありません。しばらくは林床の藪にじっと隠れていて、親から餌をもらって過ごします。雛が完全に独立するのは巣立ちからさらに1カ月近くも後のことです。

3. 持ち込まれた捕食者—イタチ

「最近、どうもトイレに入ると落ちつかないんです」という別の先生は、閉所恐怖症になったわけではありません。学校で余ったアカヒゲ用巣箱をもらった彼は、どこにかけようか考えました。『イタチが雛を食べるらしい、それならイタチが登れないツルツルした場所にかけて』というのでトイレの換気パイプに巣箱をかけたのです。6月になって、めでたくアカヒゲが巣箱を利用してくれましたが、彼がドアを開ける度にメスが警戒声をあげるのです。彼はアカヒゲに遠慮しながらトイレを使っているとのこと。笑い話のようですが、彼の心配はもっともな事なのです。

中之島にはイタチが生息します。在来種ではなくネズミの駆除のために人為的に持ち込まれたものです。中之島に持ち込まれた時期や頭数に関して正確な記録は残っていませんが、戦後に村が持ち込んだものです。現在ではかなりの高密度で生息し、道路沿いでは0.5頭/kmほどの頻度で目撃されます。イタチは卵や雛を捕食するため、この

ように人為的に持ち込まれた場合にはその地域の鳥類に大きなダメージを与えることがあります。

調査地に架設した巣箱では約7割の巣がイタチの捕食にあい、繁殖に失敗しています(写真-6)。イタチに卵や雛を捕食されたつがいは別の巣箱でやり直しの繁殖を行います。巣立させることのできる雛の数は減ってしまいます。中には3度も続けて卵を食べられたつがいや、抱卵中のメスも負傷して調査地から消失してしまった例もありました。今後、巣箱を架設してアカヒゲの調査・保護を行う場合には、イタチによる捕食について対策を講じる必要があります。

4. これからの調査

アカヒゲの繁殖生態に関する調査はまだはじまったばかりです。中之島のアカヒゲは夏鳥で、冬は南へ渡りをするのがわかっていますが、越冬地は特定されていません。また、調査地で今年繁殖した親鳥が来年も同じ場所に戻ってくるのか、調査地で巣立った雛はどうなのか、など不明な点が数多く残されています。これら、アカヒゲの個体群動態に関わる要因を明らかにして行くことが今後の課題です。(捕獲は環境庁・文化庁の許可と十島村の協力を得て行っています。)



写真-6 イタチに捕食されたアカヒゲの卵
イタチは卵の一部に穴を明け、中身を舂めとる。

きのこシリーズ (13)

シバフタケ

きのこは「木の子」で樹木に関係するものが多いが、草である芝生や草原に発生するきのこも少なくない。大半は傘の直径が5cm未満の小型のきのこだが、直径40cmに達するオニフスベなどもある。またスーパーで売られているマッシュルームの仲間であるハラタケも草原に発生する。これらのきのこは、落ち葉や腐植層、枯れたシバの根を分解して栄養源にしている。中にはシバフウラベニタケのようにシバの根と共生関係にあると思われる種もあるが、生態的特徴は未解明である。

シバフタケは、傘は径2～4cm、茶褐色で、乾くと白っぽくなる。ヒダは疎で白い。柄は細く中空だが強靱。全体的に乾燥ぎみ。夏から秋に、しばしば輪状に発生する。外国ではその直径が100mをこえた例もある。シバフタケの生えている場所の表面の落葉をはぐと、マットと呼ばれる白い菌糸の層が見える。落葉や土壌の有機質を菌糸でおおい、分解する。この菌糸層は雨水を地中に透さないので、増えすぎると問題になることがある。

ヨーロッパではシバフタケを好んで食用にするが、日本では食べる人は少ない。小型で肉が薄いので、あまり食欲をそそらない。ただし群生する



写真-1 シバフタケ 九州支所にて

ので、数人が食べる分を一度に採ることは難しくない。また乾燥して保存できる。江戸時代に下総でヨシタケ、信州でオギタケ、筑後でヨシダケと呼ばれていたきのこがシバフタケに似ている。葦原に生えるきのこで食用にし、味はエノキタケに似ているという。



写真-2 シバフウラベニタケ

特用林産研究室 根田 仁



図-1 ヨシタケ 利根川図志 (1855年) より

九州の森と林業 No.45 平成10年9月1日
編集 農林水産省 林野庁
森林総合研究所九州支所
〒860-0862 熊本市黒髪4丁目11番16号
TEL (096) 343 - 3168
FAX (096) 344 - 5054

URL=<http://www.ffpri-kys.affrc.go.jp/>